

令和4年度第2回山形県特定鳥獣保護管理検討委員会 発言趣旨

- 1 日時 令和4年9月15日(木) 午前9時半～11時半
- 2 開催方法 ZOOM
- 3 委員
鈴木正嗣(岐阜大学)、江成広斗(山形大学)、山内貴義(岩手大学)、藤本竜輔(農業・食品産業技術総合研究機構)、遠藤三郎(山形県猟友会)、片桐弘一(山形県獣医師会) 欠席、高橋吉彦(山形県農業協同組合中央会) 欠席、鈴木康雄(山形市)、(野口勝世の代理) 金田秀之(最上町)、石黒龍実(米沢市)、五十嵐修一(鶴岡市)、齋藤真朗(山形県) (敬称略)

(1) 第2期山形県イノシシ管理計画について(報告・協議)

(事務局)

説明

広域捕獲活動支援事業の進捗状況

(事務局)

先週、環境審議会で管理計画の変更が承認され、今月中にパブリックコメントを募集し、11月施行を予定している。

モニタリング事業について

(事務局)

GPSテレメトリー調査を始めた経緯は、はっきりしなかった。痕跡調査は、令和2年、3年度は実施しようとしたが、令和2年12月に豚熱が発生し、県外の業者が豚熱を広げるのではないかと風評被害があり、中止した。

(江成委員)

調査を始めた経緯がわからないのは問題ではないか。こうなってしまった理由を十分に検証しないと、検討委員会で議論することの意味自体が失われる。チェック体制を整えて、委員に聞き取り等をすることも検討してほしい。

昨年度の指定管理事業で目標頭数に達しなかった理由

(事務局)

冬場に銃器による捕獲が十分できなかったため。いろんな時期にいろんな方法で捕獲すると捕獲数も上がると考える。

調査について

(事務局)

ライン調査は、一ライン5～6 km、全県で5地域程度実施予定

(江成委員)

痕跡調査は冬季に実施することになっていたはず。冬のほうが足跡・掘り返し・糞の識別が容易なためである。以前も実施していたはずだが、何年か前から継続しているという話を聞かない。その資料を確認してほしい。スノーモービルを使って広範囲に調査してはどうかという話もあったはず。モニタリング手法を検討するうえで、具体的な目的と、実施可能な調査規模を提示してもらえると検討委員会でもいろいろ助言できる。

(山内委員)

事務局からの話だとカメラ調査を利用して、生息数を出したいということだったが、カメラの情報によっては、生息動向（存在の多寡を判断）になってしまう。どういうカメラの情報なのかまた、ほかの調査も具体的な手法を開示してもらおうと判断しやすい。

(江成委員)

大型野生動物生息動向調査による鶴岡市のカメラトラップのデータについて、相対個体数の評価・すなわち増減のトレンド評価には使える。捕獲に関するデータと組み合わせた分析は、個別に情報をいただければ大学でも対応できる可能性はある。

(2) 第2期山形県二ホンジカ管理計画の進捗状況（報告）及び令和5年度事業計画について（協議）

(事務局)

説明

管理計画の目標について

(鈴木正嗣委員)

狩猟免許所持者数を目標にするのは問題ないが、単に狩猟者を増やすのではなく、許可捕獲等の公的な目的に適切に従事し得る捕獲従事者を育成し、確保していくことが重要である。

モニタリング調査（ボイストラップ）について

(事務局)

林野庁の予算を使って実施している。予算上はあと2年できるようであるが、来年度からは、今まで実施してもらった森林研究研修センターから協力してもらえなくなるので民間委託も考えている。

(江成委員)

管理計画で決められている内容なので、安定した予算確保や体制整備の必要がある。民間委託だと予算も余分にかかる。ボイストラップ調査は、民間に委託

せず、行政職員でもできることを前提とした技術である。

(鈴木正嗣委員)

民間に委託することについては、内容によって検討する必要がある。学会等でも鳥獣行政が、受託する側のビジネス（営業戦略）に引っ張られてしまう危険性が指摘されている。

(森林研究研修センター)

設置・撤収には、2か月、解析には1か月かかる。1機関で全県を対応するのは難しい。

(江成委員)

市町村や県のほかの部署に依頼することを以前から提案してきた。大学としては、技術的な相談について対応したい。分業について検討していただきたい。

モニタリング調査（その他も含み）について

(鈴木正嗣委員)

- ・ 捕獲個体票の年齢について、3歳ぐらいまでだと目視でわかるが、それ以上になると前歯の根元を切って顕微鏡で観察する必要がある。現実と乖離したデータは誤解を招く。報告は目視で確認できる0、1、2、3歳以上の区分でよいのではないか。
- ・ 令和2年度二ホンジカ試験捕獲情報収集の誘引調査について、学術的に基づいた方法でやっているのか疑問である。

(事務局)

来年度の調査地や調査方法について、委員の学識経験者の方とメールで相談させてもらいたい。

(遠藤委員)

試験捕獲で多くとれたのは、生態を把握できたためである。食料がないときに何を求めているか、群れで行動していることを把握できたこと。食料として塩を求めているようだ。V字谷にはいない、U字谷にいる。妊娠したシカも多かった。

(鈴木正嗣委員)

オスジカだけでなく、メスジカも捕獲することは重要である。

(1)、(2) 共通

(江成委員)

- ・ 検討委員会の場合だけでは時間が少ないので、毎月情報を共有したほうがよい。
- ・ 民間の事業者に委託するのであれば詳しい説明をし、検討委員会で意見を聞いたほうがよい。

(鈴木正嗣委員)

- ・ 検討委員はこの場限りでの対応でなく、調査の支援もする。いろいろ相談してもらってよいのではないか。
- ・ この検討委員会の中で、事業受託業者から説明をしてもらい計画を立てることも検討いただきたい。
- ・ 目的（農業被害を減らす、豚熱のリスクを低減）、目標（生息数を減らす、被害防除柵の設置等の普及啓発を図る）、戦略（公共、公益性のある捕獲をするための、捕獲従事者の体制を整える）、作戦、戦術（どういう場所で、どんな手法で捕獲するのか）を階層化して認識しながら計画を立てるとわかりやすく説明しやすい。

(3) その他（山形県鳥獣被害対策指導者養成について）

(事務局)

説明

(鈴木正嗣委員)

非常によい。育成した方の活躍の場が必要である。

(江成委員)

- ・ 時間数やメニューに関しては、実際その現場でやられてきた方に事前にヒアリングし、設定を確認するとよい。
- ・ より高度な研修ができる民間事業体の育成も必要である。